

全科協

vol.50 *News*
NO.4

2020年7月1日発行 通巻第293号

特集

第27回研究発表大会より 博物館の社会的役割を考える 〜持続可能性の視点から〜

CONTENTS

- P2 ▶ 特集
- P10 ▶ 海外博物館事情
- P12 ▶ 7月8月の特別展等
- P14 ▶ 新規加盟館紹介
- P16 ▶ トピックス

JCSM
Japanese Council of Science Museums Newsletter

全国科学博物館協議会

〒110-8718 東京都台東区上野公園 7-20 国立科学博物館内
TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9899
<http://jcsm.jp/>

第27回
研究発表大会
より

博物館の社会的役割を考える ～持続可能性の視点から

令和2年2月14日、第27回研究発表大会がオーテピア・高知みらい科学館を会場に開催され、130名の参加者がありました。

今回の研究発表大会では、「博物館の社会的役割を考える～持続可能性の視点から」をテーマに、18件の口頭による事例発表が分科会形式にて行われました。事例発表の内容につきましては、冊子資料として各加盟館園のみなさまにお配りしていますので、本号ではポスターセッションの発表を中心にをご紹介します。

館種や規模など加盟館園の多様性が表れた事業事例になりましたが、みなさまの館運営のお役にたてば幸いです。



博物館の社会的役割を考える～持続可能性の視点から

福岡市科学館
高安 礼士

1 はじめに

こわごとと集まった高知市では、2020年4月始めの現在でこれほど大きな事態に変化することはほとんど予想していなかった。新型コロナウイルス感染対策のための「3密」を避けることは、科学博物館運営を根底から変えるものであり、本格的な見直しが必要であることは明らかである。感染リスク対策を考えた科学館運営の試みは一部の科学館で始まっている。ここでは、少しぼけた論議になることは承知の上で、2月時点における研究発表の分析と今後の方向性を考えてみたい。

全科協の研究発表大会の過去3年間は「地域文化の核となる博物館」を主テーマに、「資質能力(人材育成)」「地域振興」「イノベーション」などを各年の副テーマのキーワードとして発表を行ってきた。今年からの基本テーマは「博物館の社会的役割」とし、「持続可能」の観点から科学館の社会的役割を再考しようとするものであった。

日本の多くの博物館にとってその運営の方針としているのは「博物館法」であり、自然史博物館は「地域の有形、無形の資料」を「地域住民」のために「収集・保存」し、それを活用した「教育事業」を行うことをミッションとしている。また、理工系科学館の多くは、体験型展示を中心とした「教育活動」を「地域住民」のために実施してきた。「社会的役割」は「地域のため」という意味であった。しかし、「観光事業」特に「インバウンド」に対応する事業を期待される状況下では、「地球規模での社会的役割」も考慮する必要があるとされた。開催地

の高知市は観光対策のある良い例となっていた。

今回の大会テーマはこれまでの延長上にあるもので、「地域文化の核」から「博物館の社会的役割」と「その持続可能性」のために科学博物館は何をなすのか、が問われている。これらに対する答えとして、自然史博物館の方々からは「正統的な博物館活動」を、科学館の方々からは「SDGs」などの「今日的テーマ」を追求することによって「社会の持続性」に貢献する提案が行われたとみることができよう。また、それらを一般化した「ICOMにおける新しい博物館の定義」も議論された。

2 発表内容にみる特色

今回の口頭発表18件、ポスター発表6件を、事業が博物館法に準拠した「伝統的」活動と社会的活動の「新分野」、さまざまな機関、団体等との「連携」、「外部資金」の活用、「人材育成」を考慮しているか、などで分類し表-1に示した。

その結果は、ポスターセッションを含む発表24件のうち9件は「博物館資料を研究・活用する伝統的事业」であり、18件はSDGsやITなどの科学の新しい分野のテーマであり、連携事業の形態をとったものが15件であった。また4件が外部資金を用いたもので、大会の際には「数多く」と総括したが意外に少ないことがわかった。しかし、今年度事業は直接の外部資金導入がなくても、以前に導入し今日の事業に続いていると判断されるものが3～4件あり、合計7～8件が外部資金導入によって始めた事業と推察できる。

表-1

発表テーマ		発表内容	新分野	正統的	外部資金	連携	人材育成
A-①	気象災害の軽減に向けて		*			*	
A-②	福島県における人材育成科学講座の事例報告					*	*
A-③	教員有志と科学館・自然史系博物館の協力による地学普及イベント「こどものためのジオ・カーニバル」の紹介					*	*
A-④	科学館の展示と日常を繋ぐフィールドワークとサイエンスナビへの情報集積が可能にする深化し続ける展示～フィールドワーク「水を知る旅に出よう」を例に～		*			*	
A-⑤	水草調査を通じた地域連携に果たす博物館の社会的役割		*	*		*	
A-⑥	国立科学博物館による「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」の成果とこれから		*	*	*	*	*
A-⑦	地方都市における科学館の役割のモデリング～DBO方式のリニューアルと中長期計画策定を通じた一考察～		*			*	
A-⑧	科学館における有償ボランティアの導入と課題ー福岡市科学館サイエンスキャストを例にー		*			*	*
A-⑨	MDPPと自然史系博物館の将来の機能			*			
B-①	生物多様性をテーマにした科学教室実施について		*			*	
B-②	地域に寄り添うプログラミング教育を目指してー地域における科学館の役割ー		*			*	
B-③	教員を対象にしたSDGs研修の実施		*			*	*
B-④	持続可能な社会における科学系博物館の新たな使命ーサイエンスリテラシーの向上を目指してー		*				*
B-⑤	外来生物問題をどのように伝えるのか？地域博物館の取り組み		*	*	*	*	
B-⑥	伝える術を磨くー展示解説のあり方に関する考察ー		*	*	*		
B-⑦	伝統知と先端知が交わる知の交差点を目指してー東京農工大学科学博物館の新たな試みー		*	*			
B-⑧	地質標本館が伝える、人・地形・地質の関わり		*				
B-⑨	生物多様性情報の利用：世界の潮流と日本の現状		*	*		*	
ポスターセッション							
1	海の環境啓発活動団体と連携した科学館ならではの取り組み					*	*
2	「出会いの場」であり続ける展示室ー展示交流ってなに？から10年ー			*			
3	「かはくのモノ語りワゴン」における外国語、障害者対応の取り組み			*			
4	宇宙素粒子系基礎科学の“聖地”からの多角的な発信		*				
5	社会のニーズに寄り添う公開天文台ー南阿蘇ルナ天文台の取り組みー		*				
6	来館者と街に出て「サイエンススポット」を探検！ー市民参加で街の科学的情報を蓄積・展示する活動ー		*			*	
合計			18	9	4	15	6

また、今回も館種による事業の目的（テーマ）と手法による違いがあり、自然史博物館は地域の自然や種の保護等によって自然と社会の持続性に寄与し、理工系博物館や科学館ではグローバルな課題として示されたSDGsに留意しながら「科学と社会の関係」で持続性に貢献できると考えていることがわかった。そのきっかけとして外部資金を導入し、連携先の資源を活用していると考えることができよう。さらに、福岡市科学館の「有償ボランティアの導入」の提案は、言葉の定義に関する議論があったが、新しい運営の提案として「博物館の持続性」についての一つの提案と理解できるだろう。

3 今後に向けて

「持続可能な社会に寄与する博物館」はいくつかの新しい視点が必要なものである。ジャレド・ダイヤモンドの著作である『文明崩壊』や『銃・病原菌・鉄』によれば、長い目で見れば社会は突然崩壊するものである。今回のウイルス感染による社会の持続性崩壊の危機は、人間社会につきものであったことを歴史は示している。その原因を究明し、あらかじめの対策を構築するのに大きな役割を果たすのが「科学」であると信じたいが、「狭い意味での科学技術」だけでは崩壊阻止の役に立たなかったことを歴史は示している。自然環境や社会統治を含めたマネジメント構造が大きな役割を果たしており、「過去の文化や思考に縛られていること」が多くの崩壊原因となったと言われている。

今日、科学そのものが急速な変革期にあり、科学博物館の活動領域の拡大を伴う「科学博物館の変容」は、「新たな社会機能」を具備することで「地域と社会の持続性」に寄与することができるだろう。その結果として「科学博物館の持続性」を獲得し、これまで連携したことの無い機関との連携に踏み出すことで地域固有の文化創造が可能となり、幅広い存在意義を付加することとなる。本大会でもそのような事例が報告された。

また、ユヴァル・ノア・ハラリの『サピエンス全史』に掲載の年表のように、科学博物館は「宇宙誕生」「地球誕生」「生命誕生」「人類出現」「農業革命」「産業革命」「AI、ゲノム編集」などの時代を貫くものをテーマとして、「持続可能な社会」のみならず「持続可能な地球」の実現のための活動を進める必要がある。そのためにも、それぞれの館の持つテーマを138億年という時間の中で位置付け、普遍性を獲得することが求められることとなった。

さらに、今日の「ソーシャルディスタンスを保つ」感染症対策下では、博物館の主要な機能であるコミュニケーション機能は見直しが必要となり、地域の情報収集力の低下対策として「情報集積機能」が新しい「社会的機能」としてその重要性が高まることは確実である。科学博物館は自然と社会環境に関する調査・研究による情報集積機能を充実させ、図書館などとともに情報提供機能の充実が社会的に求められる時代となったのである。問題はどの範囲の情報かであるが、これにはミッションによるテーマの拡張が必要であり、ビッグ・ヒストリーにつながる「人新世（アントロポセン：Anthropocene）の提案」は、自然史系と理工系からなる「科学博物館」が「地域と社会の持続性への寄与」を統一的に考えるための一方法であると言えるだろう。

海環境啓発活動団体と連携した 科学館ならではの取り組み

福岡市科学館
板垣 早織

1. はじめに

福岡市は、北に海（博多湾）、南に山（脊振山）がある自然豊かな都市である。2019年夏、福岡市科学館では博多湾について学ぶイベントを実施した。海環境啓発を目的とした展示と、ダイバーが生中継で博多湾の海中の様子を伝えるサイエンスショーを組み合わせたもので、海の環境を守りいきものを育むことを主活動としている地域の団体と連携して取り組んだ。地域環境の豊かさを科学館で伝える新たな手法として本事例を紹介する。

イベント「夏うみDIVING」の構成

1	【展 示】・博多湾の紹介 ・質問コーナー	7月1日～8月20日
2	【ショー】・海中から生中継サイエンスショー (3回)	7月20日、7月31日、 8月20日
3	【展 示】・博多湾の紹介 ・ダイバーからのメッセージ (質問とショーのフィードバック)	8月21日～9月16日

2. 科学館の社会的役割

○科学的な視点を育む取り組み

科学館にとってサイエンスショーは、来館者と科学を繋ぐ大切なツールであり、老若男女問わず科学を楽しむことができるイベントである。

このたび実施した海中からの生中継サイエンスショーは、海中を実験舞台に展開した。博多湾海中と科学館ショーステージをネット中継で繋ぎ、生中継で対話しながら実験を交えて実施した。海中に生息するいきものを探求したり、海中だからこそ起こる物理現象を疑似体験したりすることで、海を科学的な視点でとらえることを学ぶ機会を提供することができた。

○地域環境啓発

当館は博多湾沿岸から約2.5kmとさほど離れておらず、海を身近に感じることができる。しかしながら、来館者も含む市民の海に対する関心はそれほど高くないように思う。そこで、広く市民が福岡の海（博多湾）の現状を知り、自然環境における海の役割や暮らしとの関わりについて学ぶこと、自分たちの生活環境を見直したり、自然の変化に関心をもちたりする心を育むことを目的として、福岡市港湾局および環境局がもつ資料をもとにパネルを作成し掲示した。博多湾の地形や海洋生物の生態、人が住む都市が近いことによる海水（成分）に与える影響についてもグラフや模式図で示した。

身近な自然の豊かさを知ることが、持続可能な社会を育むための第一歩となり得る。知ることで興味がわき、

疑問が生まれ、自らを取り巻く環境を自分事として捉えることに繋がると思った。

パネル展示の一部には、読んで感じた疑問をダイバーや館スタッフにその場で質問できるように、質問コーナーを設けた。そしてショー終了後にはフィードバックの回答パネルを掲示、ショーの内容も振り返りできるようダイジェスト映像を動画展示した。

○地域団体との連携

博多湾の環境を豊かにするために活動を続けるプロダイバーの大神弘太郎氏（一般社団法人ふくおかFUN代表）には、本イベントに企画から協力いただいた。大神氏はこれまで、福岡市環境局主催の福岡環境フェスタに出展表彰されるなどの経歴もあり、当館としてもこのような活動を広く市民に伝えたいという思いがあった。

本イベントの実施により、科学館を軸に市民と地域団体が繋がり、科学館と環境啓発活動団体やそれに関わる人々との連携関係も構築することができた。

なお、これらの活動は船の科学館「海の学びミュージアムサポート」を受けて実施した。

3. おわりに

本イベントは、持続可能な社会を育むために必要な、まずは身近な自然環境を知ることに関わったと考える。このような環境啓発は、本事例を応用して、海だけでなく、川や山、都市環境など対象を変えて実施することも可能である。さらには、知ることから一歩進んだ内容として、市民とともに考え行動するイベントへと発展させることもできる。

持続可能性の視点から科学館に期待される社会的役割は、自然環境の現状や地球の歴史を市民とともに双方向的に学ぶことが挙げられる。誰もが地球環境に関心をもつことが必要であり、身近であっても普段見ることがない海中をリアルタイムで体験できる今回のようなイベントで興味を抱いてもらうことができたなら嬉しい。



「出会いの場」であり続ける展示室 ー展示交流ってなに？から10年ー

滋賀県立琵琶湖博物館
中村 久美子、北村 美香

1. 琵琶湖博物館「展示交流」の背景と目的

琵琶湖博物館では開館当初から、「展示交流員」を各展示室に配置しており、来館者との展示交流を大切にしてきた。これは、開館前から始まった考えであり、展示交流とは「物や空間としての展示は、交流・サービス精神と結びつくことで、一方的な伝達ではなく、来館者にとっての双方向の出会いの場にもなりうる。」(運営計画案1995年)ものである。

展示交流員の仕組みは広く全国に広がり、同様の仕組みを取り入れた館もあった。開館以降も展示交流についての議論は続いたが、時間がたつにつれ語られる機会は少なくなっている。学芸員や展示交流員の入れ替わりの度に、双方に「展示交流」への認識にずれが生じたためかもしれない。当館ではリニューアルを迎え、新たな展示交流の在り方が求められている。

そこで本研究では、琵琶湖博物館における「展示交流」とは何かを過去の議論から再整理し、新たな展示交流とは何かを再定義することを目的に、展示交流による来館者の変化や新しい発見についてまとめ、展示室が出会いの場であり続けるために展示交流が果たす役割について議論する。そして、今後求められる新しい展示交流の在り方や博物館における展示交流の意義を探る。

2. 方法および対象

「展示交流員と話そう」を例に過去の傾向をまとめ、展示交流員へのアンケート調査を2019年12月に実施(対象23名)。

展示交流員：来館者の案内役としての役割を持つだけでなく、展示を通して来館者と交流し興味を引き出しより楽しさを感じてもらえるよう努めている。(要覧)

展示交流員と話そう：展示交流員によるさらなる交流業務の充実を目的に、展示交流員が各自テーマを設定し、学芸員のアドバイスを受けながら知識の習得、交流方法を検討して、閑散期(12～3月)に実施する(2002年～)。

3. 結果および考察

過去の「展示交流員と話そう」のテーマ件数は開始時の34件から、2008年頃には25件前後に減少した。これに合わせて「展示交流員と話そう」の専用ポストはなくなり、通常ポストと兼務で実施する形になっている。これらは人員削減による結果であるが、この変化は展示交流そのものへの影響が大きいと考えられる。またアンケート結果(N=10)からはテーマ選定理由に、展示を見て：7件が最も多く、自分で経験して：4件、学芸員から聞いて：3件であった。聞き取りでは、自分で経験する機会や学芸員との交流を希望する声が多かった。また、「展示交流員と話そう」をきっかけに展示交流員が



来館者と共に新たな気づきをし、それが次の展示交流の意欲につながるという意見が多かった。「展示交流員と話そう」をきっかけとした展示交流が、自身のスキルアップや向上心に影響していることがうかがえる。今後の課題として、

フィールドでの実体験や学芸員との交流によるさらなるスキルアップが求められている。

4. 今後の展開と課題

展示交流は、開館前に展示を楽しむ方法として「展示の自分化、展示との対話」という考え方から生まれた。そして開館から20年、「展示交流員と話そう」などをきっかけとする「展示交流によって生まれる相互の発見・学び」が存在していることが分かった。

今後は人員削減やリニューアルによる展示の多様化(デジタルコンテンツ、参加交流型スペース)など厳しい変化が伴うが、来館者のニーズに合わせた琵琶湖博物館の新たな展示交流の在り方の検討が求められる。さらに、全国の博物館における展示交流やそれに類似する機能の意義と位置づけの整理を行い、展示交流の広がりについても整理していきたい。

本研究においてアンケートにご協力いただいた展示交流員の方々に感謝申し上げる。本研究は琵琶湖博物館共同研究(代表中村久美子)において実施した。

現場の難題、求む。

お客様の課題の数だけ、答えがあります。

- 業務で安心は出来ない
- 場所を選ばない柔軟な働き方
- お客様に驚きと感動の空間を
- 多様な働き方改革支援サービス
- 設備価値向上ソリューション
- リピーターが増えるお店にしたい
- お客様の行動分析による店舗オペレーションの最適化

パナソニック システムソリューションズ ジャパン株式会社
https://www.panasonic.com/jp/company/psj.html

「かはくのモノ語りワゴン」における外国語、 障害者対応の取り組み

国立科学博物館
園山 千絵、相沢 紗百合、志津田 加奈子

1. 「かはくのモノ語りワゴン」概要と特徴

「かはくのモノ語りワゴン」は、当館で活動する「かはくボランティア」が、実物の標本や模型など「モノ」を用いて、来館者に展示を見るポイントや展示に込められた思いなどを約5分で紹介する事業である。特徴としては、①ハンズオン教材で来館者を惹き付ける、②双方向コミュニケーション、③全来館者が対象、④展示の目の前で実施、が挙げられる。

ワゴンの上にシンボルになるような「モノ」を置くことで来館者の興味を引き、一方的な解説ではなく、相手の興味に合わせ、情報量を調節し、コミュニケーションを取りながら実演するので、小さな子どもから海外の方まで気軽に参加できる事業となっている。触るだけ、見てみるだけでも、関連した展示に興味を持ってもらうきっかけになるが、より多くの人に少しでも何かを伝えるため、補助的に次のような対応をしている。

2. コミュニケーション補助ツール

多言語対応としては、まず、英語で対応可能なボランティアに「English OK!」のバッジを付けてもらっている（令和2年度30名）。今年度からは「中国語」「韓国語」「ドイツ語」「フランス語」対応可も追加する予定である（延べ6名）。さらに、英語のフリップを初期段階で作成した。現在、64プログラム中61プログラムで配備している。韓国語・中国語については、令和元年度、試行的に3プログラムを配備したところである。

触れる標本等がある、ということで、視覚障害のある方にも参加してもらいやすい事業であるが、プログラムによっては地図や写真を使って視覚的に伝える内容もあるため、地形や写っているものの外縁が分かるように、既存のラミネート加工した地図や写真の上に、圧着した透明なラミネートフィルムを貼って凹凸を作り、文字情報には点字も併記して、視覚障害のある・なしに関わらず、同じ教材で内容を紹介できるツールを作成した（3プログラム）。聴覚障害のある方向けには、口頭で紹介している内容を外国語フリップと同じように、日本語で紹介するフリップを試行的に作成した（3プログラム）。

3. 課題

当初英語だけであった外国語フリップを韓国語・中国語も用意することで、「中国や韓国からのお客様にも興味を持ってもらえた」など英語でのコミュニケーションが難しい来館者もワゴンに参加できる場面が増えた。しかしながら、英語も同様だが、フリップで内容を伝える

ことはできても、相手からの質問を理解し、それに答えることはできないため、ワゴンの特徴である双方向コミュニケーションとしては充分とはいえない。携行用翻訳機も活用しているが、専門用語や同音異義語の変換が上手いかわからない場面もある。ボランティアからは英語や中国語などの研修の要望もあるが、費用的にも実施することは難しい。

凹凸や点字を併記したフリップについては、凹凸の程度や点字表現の不明点があったが、視覚障害のある方の協力を得て解決した。日本語フリップについては、英語と同じ内容を日本語表記すればよいと単純に考えていたが、筑波技術大学の教授、聴覚障害のある学生の協力を得て、プログラム「恐竜絶滅のナゾを追う!」のフリップを見てもらったところ、「文字数が多くて読む気がしない」「伝えたいことが端的に分からない」など厳しい意見をもらった。このような意見を元に、①文字数が多いパネルは複数枚に分ける、②できるだけ箇条書きにする、③イラストや写真などイメージで伝える、を軸に改良を試みた。①②については比較的容易にできたが、③については、難しいことが分かった。例えば「衝突によってできたクレーターは直径約160km（関東平野がすっぽり入る大きさ）」という文章を地図やイラストを使って表現する場合、どの地図を使うと分かりやすいのか？ 正確に160kmの円を描くには？ 隕石のイラストは正確か？ など、正確さと分かりやすさの両方を兼ね備えるにはどうすればよいのか、今も試行錯誤が続いている。

いずれにせよ、どのように伝えたら分かりやすいのか、相手への理解を深め、専門家のアドバイスも受けながら、経験をまとめ、次へつなげていく必要を感じている。



宇宙素粒子系基礎科学の“聖地”からの多角的な発信

ひだ宇宙科学館 飛騨市神岡振興事務所
宇宙物理学支援室
高知尾 理

■はじめに

一般に基礎科学の分野は、成果が即座に市民社会へ反映されることは稀である。とりわけ宇宙や素粒子の分野は日常生活との接点も少なく、その研究意義を意識する機会は極めて少ない。一方で、特に実験・観測分野では必要な人員や予算が大規模化しやすい傾向にあり、その意義を継続的に発信し理解を求めていくことは重要である。

別の観点として、地方では東京一極集中や財政力の疲弊などから来るさまざまな課題が集積しており、地域の魅力の発掘と発信が求められている。

日本で唯一2度のノーベル物理学賞を輩出した研究拠点が立地する岐阜県飛騨市では、こうした経緯から2017年

に東京大学宇宙線研究所と連携協定を締結しさまざまな協働事業が行われている。上記のような背景の中、2019年3月に地域から基礎科学を伝えていく施設として、地方創生応援税制（企業版ふるさと納税）を活用する形でひだ宇宙科学館カミオカラボが開館した。



■館の特徴

館に常設されている展示はニュートリノや重力波等の宇宙物理学分野に特化している。一方で国土交通省が定める道の駅の敷地内に位置していること、入館料を無料に設定することにより、入館の敷居を下げ多様な来館者層の獲得を目指している。

常設展示は小学校低学年から体験可能な展示を充実させ、館内にサイエンスコミュニケーターを常駐させ来館者との対話にも力を入れることにより、難しいテーマの間口を拡大させることに注力している。また、実際に研究が行われている現場との距離が近いことで研究者との接点を生み出しやすい環境にある。

■館がつくる新しい関係性

館が提供する展示体験や解説サービスに加えて、「訪問者」「研究者」「地域住民」という3つのアクターによる3つの接点を作り出す拠点として機能し、そこで起こる相乗効果が新たな魅力となり、「科学」と「地域性」

をともに発信していくことをひとつの指針としている。接点1（研究者と地域住民間）では、研究者らが地域住民を主対象として日常の研究生活等について話すりレー形式のイベントが計7回行われた。接点2（訪問者と研究者間）では、鉱山内にある実験施設一般公開において当館をバスの発着拠点としさまざまな同時開催イベントを行うことで、研究者に直接質問できる機会を増やした。接点3（訪問者と地域住民間）では、地域に住む中高生が研究の一端を学び、訪問者に解説する「ラボサポーター制度」を導入することで両者の交流の機会を創出した。

館の取り組みとしては他に、サイエンスコミュニケーターによるミニトークや、展示解説ツアー、小中学生を対象としたプログラミング教室などを行っている。

■現状分析

開館から9ヶ月間（2019年4月～12月）での総入館者数は12万人を超えた。これは、道の駅という立地条件や入館料無料という特性に起因した入館に対する敷居の低さが功を奏した結果と考えられる。

来館者に館内でお願いしている任意アンケートでは、「総合的な満足度」で93%が5段階評価で4以上の結果となった。また、「スタッフの対応」でも93%が4以上の回答が得られた（回答者数1,030）。これらは体験展示の充実やスタッフによる対面での解説が高く評価されたものと考えている。

また、来館者から頂く質問としては基礎科学のそもそもの意義を問われることが特に多い。これは研究の規模感や不思議さに気が付いた上で、それが自身の生活と結びつかないことに疑問を持ったからであろう。カミオカラボがこうした疑問を表面化させて対話するきっかけとして機能しているものと考えられる。

■終わりに

今回は最初の段階として、地域で行われている基礎科学の魅力を地域から世界に発信するための拠点が整備されたことを報告した。

しかしながら決して大きくはない科学館から持続的に発信を行っていくためには、地域内外とのつながりや人の流れを育てていくことが重要である。

飛騨市内では、宇宙物理学実験施設として新たにハイパーカミオカンデ計画が2027年度の完成を目指して動き出した。今後は着工開始に伴う交流人口の増加や注目度の高まりが予想される。これを好機と捉えて発信を続けるとともに、次世代の発信者育成をも念頭に入れた持続的な取り組みを行っていきたい。

社会のニーズに寄り添う公開天文台 ～南阿蘇ルナ天文台の取り組み～

南阿蘇ルナ天文台
宮本 孝志、武藤 祐子

■はじめに

博物館は、資料の収集・保管・展示による教育・調査研究の4つの基本的な機能を持ち、その他にも近年は、社会とのコミュニケーションを目的とした活動が活発に繰り広げられる場になっている。本発表では、現在、南阿蘇ルナ天文台が取り組む社会的活動の中から、従来の公開天文台施設・設備のあり方に縛られず、急速に変化する社会ニーズや新たなコミュニケーションの形に対応した“天体や宇宙を観察して学び楽しむ”ための3つの活動について報告をした。

■“天体や宇宙を観察して学び楽しむ”ための 3つの活動

1) 日本公開天文台協会 (JAPOS) での天体解説員を対象とした解説技術の研修活動

2012年に発足したJAPOSの「公開プログラムワーキンググループ」は、天体観測会の解説技術の構造分析、構成要素の組立ワークショップの実施などにより、観測会の解説技術の明確化と解説技術の向上を目指して活動をしている。また2018年からは、急速に変化する情報社会に沿うべく、「次世代型公開天文台検討ワーキンググループ」を立ち上げ、公開天文台と天体観測会の今後のあり方について、博物館世代論に依って各世代の手法の違いを論じ、時代に合った学びの質・学び方について検討を進めている。

2) 第3世代型天体観測会『星空体験ツアー』

当台が実施している滞在型の「星空体験ツアー」は、天文台で行われる一般的な解説形態とは異なる方式の解説である。本ツアーは、15名毎に1名の解説員（星のコンシェルジュ®）が専属で担当し、口径82cmの反射式天体望遠鏡を備えた天文台、高精細の4Kプラネタリウム、野外広場（星見ヶ原）などを少人数でまわる、約100分間のプレミアム・ツアーとして毎晩開催している。※2020年4月現在は新型コロナウイルス流行拡大防止につき一部対応を変更。

3) 第4世代型天体観測会（サイバー天文台）など

天文台でのリアルな天体観測だけではなく、インターネットを通して天文台を共有することで、全国各地の人とのコミュニティ創りを進めている。その一例として、天文台と天文台同士をつなぐ二地点合同観測会では、2020年1月に東京都上野にある国立科学博物館の天文台と当台にて、天文台間のネットワークを通じた合同天体観測会を実施し、一定の評価を得ている。このサ



イバー天文台は、天文や機器に知識のない、一般の方でも楽しく利用できるものとして、パソコンやスマホを使って簡単に利用できる仕組みを想定している。また、このシステムは、自宅のパソコンから天文台の望遠鏡をリモート操

作して、天体写真を撮影することができる「公開天文台のオンラインサービス」も含み、大口径望遠鏡を使用し、一般の方でも完成度の高い鑑賞用天体写真の撮影および画像処理ができるように基盤の整備を進めている。

■おわりに

2020年、全世界に渡る新型コロナウイルスの流行拡大によって、想定よりも速いスピードで人々のネット利用が増加し、社会ニーズもまた、急速に変化をしている。この変化をしっかりと受け止め、我々が「より多くの人々に宇宙の夢とロマンを届けたい」と計画してきた、新しいコミュニケーションの場としての天文観測の形や、以前は不可能であった天文台のシェアによるインターネットを通じた「一家に一台望遠鏡」を実現すべく、今後も新たなコミュニケーションの形に対応した“天体や宇宙を観察して学び楽しむ”ためのシステム形成を進めていきたい。



来館者と街に出て「サイエンススポット」を探検！ —市民参加で街の科学的情報を蓄積・展示する活動—

福岡市科学館 藤瀬 雅子
(株)HUMI コンサルティング 中村 佳史

【サイエンスナビについて】

福岡市科学館では、新しいタイプの情報提供コーナーとして、サイエンスナビを設けており、来館者が無料で楽しむことができる。サイエンスナビは、「体験型展示」の情報と、図鑑や科学雑誌、科学専門チャンネルなどさまざまな科学情報をつなげて利用者に提供する「サイエンスナビシステム」を中核とした空間である。コーナーコンセプトは「小さな疑問を大きな不思議に」。館内の展示見学や実験、イベントなどの参加体験で生まれる「小さな疑問」を大切に、知識や発想を広げることをサポートする場を目指している。(サイエンスナビは、国立情報学研究所・高野明彦教授が監修)

【サイエンススポットまち歩き】

参加者(市民)とつながることで、より興味深いコンテンツをつくりあげる「サイエンススポットまち歩き」について紹介する。

科学館での「学び」を館内で完結させず、日常生活と結び付けて考え、いかに活用されているかを発見することで、知識としてより定着していくと考えている。そこで、参加型イベントとして定期的に行っている。来館者にとって生活の場である福岡の街なかで、科学を学び、科学的知見を知ることができるスポットを「サイエンススポット」と名付け、参加者とともに収集・編集するフィールドワークである。発見や疑問を基点にして考え調べることで、新しい発見や次の疑問が生まれ、科学的なものごとを見る大切さ、調べることの楽しさを体感することをねらいとしている。

さらに、このフィールドワークで収集した「サイエンススポット」は、先述のサイエンスナビシステムの中に登録できる仕組みを持っており、市民とともに科学館の展示を作っていくねらいでもある。

【まち歩きの流れと成果】

スタッフは、フィールドワークを実施するにあたり、事前に科学館周辺の下見からサイエンススポットやコースを選定する。气象台など、事前申請が必要な場所に説明と承諾を得て、当日の流れを決定する。

当日は、科学館にてまず座学を行う。フィールドワークの意義、目的、コースの中の注目ポイントを説明後、撮影器具(スマートフォン)、ワークシートを持って、街なかへ出発する。スタッフの決めたコースを歩く中で、参加者が発見したことや疑問に思ったことをワークシートに記入していく。帰館後、参加者が発見した「サイエ

ンススポット」や疑問などを発表し、「サイエンスナビシステム」へ登録するスポット候補を絞っていく。最終的には、スタッフが登録作業をし、来館者がいつでも見られるようにし、参加者以外にも伝えていく、という一連の流れとなる。

初年度は、科学館周辺コースで何回か「まち歩き」を行った。次年度も継続して科学館周辺コースを探索しつつ、主にリピーター向けに、このコース以外のフィールド(福岡市の中心部・天神)に挑戦した。

現地では、なぜ市街地の中で樹々が成長できるのか？鳥や虫はどのように生息するのか？などの疑問を見つけ、考え、調査した。

2年間の「まち歩き」実施で、4組の親子(小学1～4年生と保護者)がリピーターとして定着した。彼らは、科学館で、自らの疑問を調べ楽しい報告をしてくれる。サイエンスナビから発信した「小さな疑問を大きな不思議に」が伝わっていると確信できる。彼らは館内のさまざまなイベントに参加するなど、当館のスタッフとも馴染み、ヘビーユーザーに成長している。

【今後の展望】

現在サイエンスナビシステムの「サイエンススポット」は開館時から18ヶ所追加登録され、40ヶ所に増えた。

現在はスタッフが情報更新を行っているが、今後は参加者自身がスポット説明を考え、登録する過程を一連の活動として、取り組んでいく計画である。

この「まち歩き」の良さは、福岡市科学館周辺だけでなく、全国津々浦々で取り組めることである。まだまだ試行錯誤の福岡市科学館だが、地域(市民)の方々から育てていただき、次世代の担い手の成長をともに感じる科学館を目指していきたい。





■ 廃館

米カリフォルニア州のシエラ子ども博物館が、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で廃館

2020年4月7日に、サンフランシスコの真東250キロ、広大なヨセミテ国立公園の入口になっているオークハースト（人口：約2,800人）にあるシエラ子ども博物館が、新型コロナウイルス感染症の拡大による影響を受けて、廃館に追い込まれた。非営利団体によって運営されてきた同館は、1997年の開館以来、地域の年少の子どもに対して、科学と芸術を手で触れながら学ぶ機会を提供してきたが、ここ数年続いてきた、いろいろな要因による経営不振に、2020年3月のカリフォルニア州各地での新型コロナウイルス感染症の急増と、それにともなう外出禁止命令（3月19日発令）が追い打ちをかけ、惜しまれつつ、廃館を余儀なくされた。

Children's Museum of the Sierra, Oakhurst, CA.
<https://sierranewsonline.com/childrens-museum-of-the-sierra-announces-permanent-closure/>

■ 新設館

豪州アデレードで、「発見の博物館」が開館（2018年）

2018年5月11日に、南オーストラリア州の州都アデレード（人口：約130万人）にある南オーストラリア大学で、「発見の博物館」（Museum of Discovery）という新しい科学館がオープンした。総事業費2億4,700万豪ドルをかけた同館では、科学と技術に関連したテーマで、さまざまな展覧会がほぼ同じ時期に数本併行して開催されている。開館した2018年には、アデレード周辺に大昔から住んでいる先住民カウルナ族の宇宙観と季節観を紹介した「Our Sky」展のほか、アルゴリズムの可能性と限界を紹介した「It's My Pleasure - Can algorithms really know you?」展や、痛みが起こる仕組みを紹介した「Feeling Human」展、鳥類とハチが飛ぶメカニズムを紹介した「Birds and Bees」展、心を癒やす自然の音を紹介した「On Place」展と、幸福度を測定する計測器ヘドノメータのメカニズムを紹介した「Hedonometer」展が、それぞれ6カ月の期間で開催された。主な観覧者の年齢は、南オーストラリア大学で学ぶ学生を含む、15歳から25歳までの年齢層。年間入館者数は約20万人。初代館長：Kristin Alford博士（科学教育の専門家）。発見の博物館は、2020年3月25日から新型コロナウイルス

ス感染拡大予防のために臨時休館が続いているが、休館に先立って、2019年11月末から開催していた特別展（巡回展）「Seven Siblings from the Future」（会期：2019年11月30日～2020年5月24日）を、急遽3月18日より前倒しでオンライン展示に変えた。同展は、長く続く気候変動に対して、各国の指導者が何も対処しなかったことで、環境が厳しく悪化した南オーストラリア州の仮想現実の未来（2050年）を描いており、いま地球的規模で悪影響を起こしている気候変動への警鐘を鳴らしている。

Museum of Discovery, University of South Australia, Adelaide, South Australia.

<https://mod.org.au/>

<https://www.adelaidenow.com.au/news/south-australia/see-inside-unisas-remarkable-new-museum-of-discovery/video/9892814a64255d4fd149a44a427b608c>

<https://mod.org.au/exhibitions/seven-siblings-from-the-future/>

南インド・カルナータカ州で、新しいプラネタリウムが開館（2018年）

2018年3月1日に、アラビア海に面したインド南部のカルナータカ州の港湾都市マンガロールで、最新のプラネタリウム投影機器を備えたスワミ・ヴィヴェーカーナンダ・プラネタリウムが開館した。プラネタリウムのドームの直径が18mで、170席をもった新しいプラネタリウムは、2014年に開館したピリクラ科学館の広大な敷地に設けられ、日本の有限会社大平技研（代表：大平貴之）が制作した光学式プラネタリウム投影機MEGASTAR-IIAが導入された。館内のすべての解説は、カンナダ語（カルナータカ州の公用語）と英語を併記。

スワミ・ヴィヴェーカーナンダ・プラネタリウムは、カルナータカ州によって設立されたが、建設費の大部分を寄付したスワミ・ヴィヴェーカーナンダ財団（本部：ニューデリー）の顕彰者スワミ・ヴィヴェーカーナンダにちなんで館名がつけられた。スワミ・ヴィヴェーカーナンダ（1863年～1902年）は、インドのヒンドゥー教の出家者、ヨーガ指導者、社会活動家。またヴィヴェーカーナンダは、ヒンドゥー教改革運動、インド内での社会奉仕活動、インド外への布教に尽力し、植民地時代のインドで人々に民族的自覚を促してインドのナショナリズムの高揚を支援して、インド及び欧米諸国の人々に影響を及ぼした。

Swami Vivekananda Planetarium, Mangalore, Karnataka State.

<http://pilikularsc.com/planetarium.html>

<https://www.megastar.jp/en/swami-vivekananda-planetarium-india/>

伊ナポリで、新しい医学博物館が開館(2017年)

2017年3月4日に、イタリア南部の中心都市ナポリ（人口：約97万人）で、コーポレアという名の新しい医学博物館が開館した。同館は、医学に関連した14のテーマをもった常設展示とプラネタリウム（120席）を併設した施設で、約5,000㎡の展示面積を有している。

コーポレアで設けられている常設展示のテーマは、「医学の専門用語の歴史」「人体の筋骨格系」「適正体温とからだの健康バランス」「人体の循環系」「人体の消化系」「人体の内分泌系」「人体の細胞とDNA」「人体の免疫系」「人体の感覚器官」「人体の生殖機能：性欲・生殖・出産」「人体の脳神経機能」「終わりのない患者と医師の関係史」「人間とロボット工学」「遺伝子工学」。展示のデザインと制作は、ベルリンに本拠地を置くアルキメデス社が手がけた。館内のすべての解説は、公用語のイタリア語のほか、英語と中国語を併記。なお観光都市ナポリには、ほかにカンパニア大学解剖学博物館と公衆衛生博物館の医学系博物館や、鉱物博物館、動物学博物館、古生物学博物館、天文機器博物館（カポディモンテ天文台内）の科学系施設があり、これらに日本人観光客が訪れている。

Corporea, Napoli.

<http://www.cittadellascienza.it/corporea/>

<https://www.ecsite.eu/members/members-share/news/corporea-journey-human-body>

<https://www.archimedes-exhibitions.de/en/projekt/corporea/>

イトレントで、レンゾ・ピアノ設計の新しい科学博物館が開館(2013年)

2013年7月27日に、イタリア北部の小都市トレント（人口：約12万人）で、トレント科学博物館（略称：MUSE）が開館した。新しい施設の建築設計は、レンゾ・ピアノが手がけた。常設展示では、「アルプス山脈：氷河、気候と生き物、探検史」「ドロミテ山地の形成」「アルプス山脈の自然：生物多様性、四季、森林」「アルプスとひとの関わり方の歴史と将来」。同館で開催された展覧会は、開館記念展「ドロミテ山地の恐竜」（2013年）をはじめ、「木材を使った建築と技術」（2014年）「アルプス山脈のオオカミ」（2014-2015年）「ドロミテ山地の写真」（2015年）「都市部で発見される化石」（2015-2016年）「数

学の再発見」（2016年）「絶滅危惧種の生物」（2016年）「アルキメデスの発明」（2017年）「ヨーロッパの氷河時代」（2017-2018年）「とける氷河」（2018-2019年）「ヒトゲノムの話」（2018-2019年）など。総事業費：1億ユーロ。延べ面積：12,000㎡。

Museo delle Scienze di Trento, Trento.

<https://www.muse.it/>

<https://www.youtube.com/watch?v=ZKyPgl0gctM>

<https://www.ecsite.eu/members/members-share/news/glimpse-trento>

■ 企画展・特別展

気候変動の影響で世界各地で起きている海面上昇を紹介した写真展が、ニューヨークとアムステルダムの博物館で開催

2020年4月3日に、ニューヨーク博物館で気候変動による海面上昇を写真で記録した写真展「Rising Tide」が開幕した。オランダのドキュメンタリー写真家カディル・ファン・ロホイゼンによる海面上昇の写真作品は、グリーンランドをはじめ、バングラデシュ、オランダ、イギリス、マーシャル諸島、パナマ、アメリカのマイアミ、そして同展の会場となった地元のニューヨーク市の水域で写されたものだ。当初の予定では、会期は2020年9月1日までを予定していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために、同館は2020年3月13日から臨時休館を強いられている。

同展と同じ内容の写真展が、2019年10月14日からアムステルダムにあるオランダ国立海事博物館でも開催されている。こちらは新型コロナウイルスの感染拡大防止のために臨時休館（2020年3月21日～5月31日）を強いられていたが、6月1日に全面再開され、会期が2020年10月12日まで延長された。

Kadir van Lohuizen: Rising Tide.

Museum of the City of New York, New York, NY.

<https://www.mcny.org/risingtide>

rijzend water-Kadir van Lohuizen.

Het Scheepvaartmuseum, Amsterdam.

<https://www.hetscheepvaartmuseum.com/whats-on/exhibitions/Scramble-for-the-Arctic-and-Rising-Tide/rising-tide>

<http://www.hi-europe.net/feature/culture/post/DiscoveringArctic?lang=en-US>

Kadir van Lohuizen.

<http://www.lohuizen.net/>

<https://www.noorimages.com/kadir-van-lohuizen>

List of special
exhibition!

7月8月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
盛岡市子ども科学館	特別展 2020「錯覚美術館」	7月22日～8月23日
仙台市天文台	野草園×天文台コラボ企画 写真展「野草園でみられる小宇宙」	6月6日～8月30日
秋田県立博物館	企画展 蓑虫山人－秋田を歩いた漂泊画人－	7月11日～8月23日
ふくしま森の科学体験センター	世界のカブトムシ・クワガタムシ展	7月18日～8月23日
郡山市ふれあい科学館	ホワイエ企画展「銀河の姿」	7月4日～9月30日
ミュージアムパーク 茨城県自然博物館	企画展「深海ミステリー2020 -ダイオウイカがみる世界-」	7月18日～10月4日
栃木県立博物館	テーマ展「骨が語る動物の秘密」	3月14日～9月22日
	テーマ展「おじいさんやおばあさんの子どものころの暮らし」	7月18日～12月13日
	テーマ展「土偶とハニワ」	8月29日～12月13日
	テーマ展「日光の手仕事」	8月29日～2021年4月4日
群馬県立自然史博物館	第62回企画展「空にいどんだ勇者たち」	3月20日～12月6日
群馬県立ぐま昆虫の森	第17回企画展「昆虫食展 ～未来をささえる SUPER FOOD!!～」	7月4日～11月3日
国立科学博物館	時の記念日100周年企画展 「時」展覧会 2020	6月5日～7月12日
	企画展 第36回植物画コンクール入選作品展	6月30日～7月12日

※施設の一部を閉鎖している館園や、入館に際し予約を必要とする館園がございます。各館園のホームページをご確認ください。

開 催 館	展 覧 会 名	開 催 期 間
平塚市博物館	空を見上げよう 光と色の不思議	4月1日～8月30日
上越科学館	雪の結晶のふしぎ	7月25日～8月30日
富山市科学博物館	特別展「科学捜査展 SEASON 2 -科学の力で真実を解き明かせ-」	7月18日～9月6日
岐阜県博物館	企画展「ヒアリがやってくるー外来生物とはなにものかー」	5月19日～8月30日
中津川市鉱物博物館	新着標本・収蔵品展	7月18日～12月20日
月光天文台	特別展「地球史でたどる伊豆半島」展	3月1日～8月30日
ふじのくに地球環境史 ミュージアム	新収蔵品展 2020	5月23日～8月23日
鳳来寺山自然科学博物館	鞍掛山麓四谷の千枚田展	7月18日～8月31日
鳥取県立博物館	企画展「こんにちは変形菌!とってもふしぎな生きものです。」	7月18日～8月30日
島根県立三瓶自然館	夏期企画展 島根にもいた!失われたゾウの世界	7月18日～9月27日
岡山県生涯学習センター	企画展「岡山の鉱物」	6月2日～8月10日
広島市交通科学館	夏季企画展「未来はこれカラダ!ー身体アシストテクノロジー」	7月17日～8月30日
防府市青少年科学館	企画展 「へんしん!錯覚立体展～見方を変えると違ったものが見えてくる!～」	5月12日～12月20日
愛媛県総合科学博物館	企画展「世界の昆虫大集合」	7月18日～9月22日

※次号(9月号)に掲載の9月10月の特別展情報は7月20日(月)までにお寄せください。

新規加盟館 紹介

セーレンプラネット (福井市自然史博物館分館)

〒910-0006

福井県福井市中央1-2-1 ハピリン5階

<https://www.fukui-planet.com/>

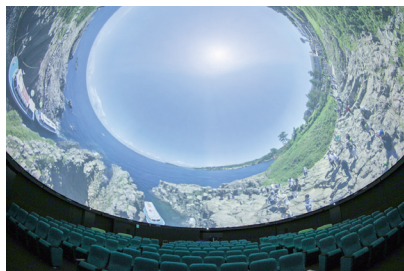


展示室

当館は福井市足羽山にある自然史博物館の分館として、2016年4月に福井駅西口にオープンした、天文・宇宙の博物館です。商業複合施設ハピリンの5階にあり、展示室とドームシアターがあります。広大な宇宙を「わかりやすく」「楽しく」「身近に」学ぶ場を提供する自然科学教育としての役割と、県都の玄関口の博物館として地域のにぎわい創生の役割を持ちます。

ドームシアターは160席あり、リアル8K全天周映像を投映することができます。投映番組の目玉でもある「星空の時間」は、その日の星座解説と天文トピックスを個性豊かなスタッフが45分間生解説をしています。他にも「映像の時間」「子どもの時間」など、さまざまな利用者層に合わせた投映も行っています。

展示室は5のスフィア（エリア）に分かれ、文化・福井と宇宙・地球・太陽系・大宇宙を紹介解説しています。展示室には解説員が常駐し、来館者とのコミュニケーションをとるほか、トラベルガイド（展示解説ツアー）も実施しています。また年に2回の特別展と、不定期の企画展を実施しています。



ドームシアター

普及啓発として駅前観望会があります。明るい駅前でも星が見えることを実感していただける、ユニークな観望会です。

全科協では、さまざまな館の皆様との交流、取り組みの情報共有を期待して加盟いたしました。当館からも情報発信ができるよう努めてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

NOMURA
GROUP

世界に、歓びと感動を



株式会社 乃村工藝社

本社 東京都港区台場2-3-4 TEL: 03-5962-1171 (代表)

ここを動かす空間をつくりあげるために。

調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営

Tanseisha

空間創造のプロフェッショナル 株式会社 丹青社

〒108-8220 東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19F
TEL | 03-6455-8100 (代表) URL | www.tanseisha.co.jp

札幌・仙台・新潟・名古屋・京都・大阪・福岡・那覇・上海

新規加盟館 紹介

東京工業大学博物館

〒152-8550

東京都目黒区大岡山2-12-1

<http://www.cent.titech.ac.jp/>



東京工業大学博物館・百年記念館 外観

東京工業大学博物館は、東急目黒線・大井町線大岡山駅の目の前に位置する建物「東京工業大学百年記念館」を利用し、活動しています。

百年記念館は、東工大が創立百周年を迎えた1981年に「科学・技術に関わる業績の保存と展示」を中心とした博物館的な建物として計画され、「遠き将来に向けての一層の発展」を期して1987年に開館しました。建物の設計者は、世界的な現代建築家として知られる本学の名誉教授・篠原一男で、百年記念館は彼の代表作でもあります。

東京工業大学博物館は、2011年に「東工大らしさ」を集約し、学内外へ発信する拠点として誕生しました。それまで事業の中心であった大学教育や研究成果のアーカイブだけではなく、初等教育から生涯教育まで見据えた展示や講演会の企画など、地域や社会に広く開かれた活動も行う「大学博物館（博物館相当施設）」として、再スタートを切りました。

現在、東工大博物館は、リニューアル・オープンに向け、閉館しています。東工大は、明治・大正期には蔵前の「東京高等工業学校」として日本の近代工業の担い手を数多く輩出し、また関東大震災後の大岡山移転と同時に理工系の国立大学へと昇格してからは、現在に至るまで多彩な分野で優れた研究成果を生み出し、日本の科学技術の発展に貢献してきました。こうした東工大の歴史と業績をわかりやすく伝える大学博物館を目指し、リニューアル・オープンの準備を進めています。

※次号（9月号）に掲載のリニューアル情報は7月20日（月）までにお寄せください。

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向／教育用地学標本



since 1974

地学標本／化石・鉱物・岩石
古生物／レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)◆

Fossils, Minerals & Rocks

株式会社 東京サイエンス

TEL.03-3350-6725 FAX.03-3350-6745

<http://www.tokyo-science.co.jp>

E-mail:info@tokyo-science.co.jp

〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

Practical Specimens for Study of Earth Science

寄附の受付について

全科協の活動を支援いただく寄附を随時承ります。
申込み、お問い合わせは全科協事務局までご連絡
ください。

みなさまのご支援ご協力をお待ちしております。

体感! タコの生態



生き物の展示が多い当館では、マダコは大人気。水槽内を歩き回ったり、魚を追いかけたり、餌を食べたりする行動を観察できます。海の生き物に触れることができるタッチプールでも季節によっては展示しており、お客様は時には触れて、水をかけられたり吸盤に吸い付かれたりと、おっかなびっくりしながらタコの生態を学べます。当館の位置する東京湾口は名産地の一つ。見て捕って食べて日本人に愛されるタコを、文化の面からも紹介しています。



次回執筆者は、科学技術館 早武 真理子さんです。



ICOM京都大会2019 報告書が公開されました

世界最大のミュージアムに関する国際会議であり、初の日本開催となる「第25回 ICOM (国際博物館会議) 京都大会2019」は、昨年9月、120の国と地域から過去最多となる4,590名の参加者を迎え、盛況のうちに幕を閉じました。参加者数調査アンケートの結果、全科協加盟館園からの参加者数は、少なくとも168名以上となることが分かりました。アンケートにご協力くださった館園のみなさま、ありがとうございました。

ICOM日本委員会のホームページにて、「ICOM京都大会2019報告書 (日本語版・英語版)」が公開されています。ぜひご覧いただき、今後の活動運営にご活用ください。

ICOM日本委員会のHP (<https://icomjapan.org/>)



全国科学博物館協議会

全科協ニュース編集委員

井島 真知 (ベルナール・ビュフェ美術館学芸員)
大島 光春 (神奈川県立生命の星・地球博物館主任学芸員)
西田 雅美 (公益財団法人日本科学技術振興財団
科学技術館運営部主任)
畠山 泰英 (株式会社キウイラボ代表取締役)
平田慎一郎 (きしわだ自然資料館学芸員 (主幹))
弘田 澄人 (かわさき宙と緑の科学館天文担当係長)
濱田 浄人 (国立科学博物館科学系博物館イノベーション
センター長)

全科協事務局

国立科学博物館
科学系博物館イノベーションセンター
(担当: 南部・竹内・苔米地)
TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9899
info@jcsm.jp
発行日 2020年7月1日
発行 全国科学博物館協議会 ©
〒110-8718
台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
印刷 株式会社セイコー社